



梅若研能会

四月公演

【田村】三世 梅若万三郎 (前島写真店)

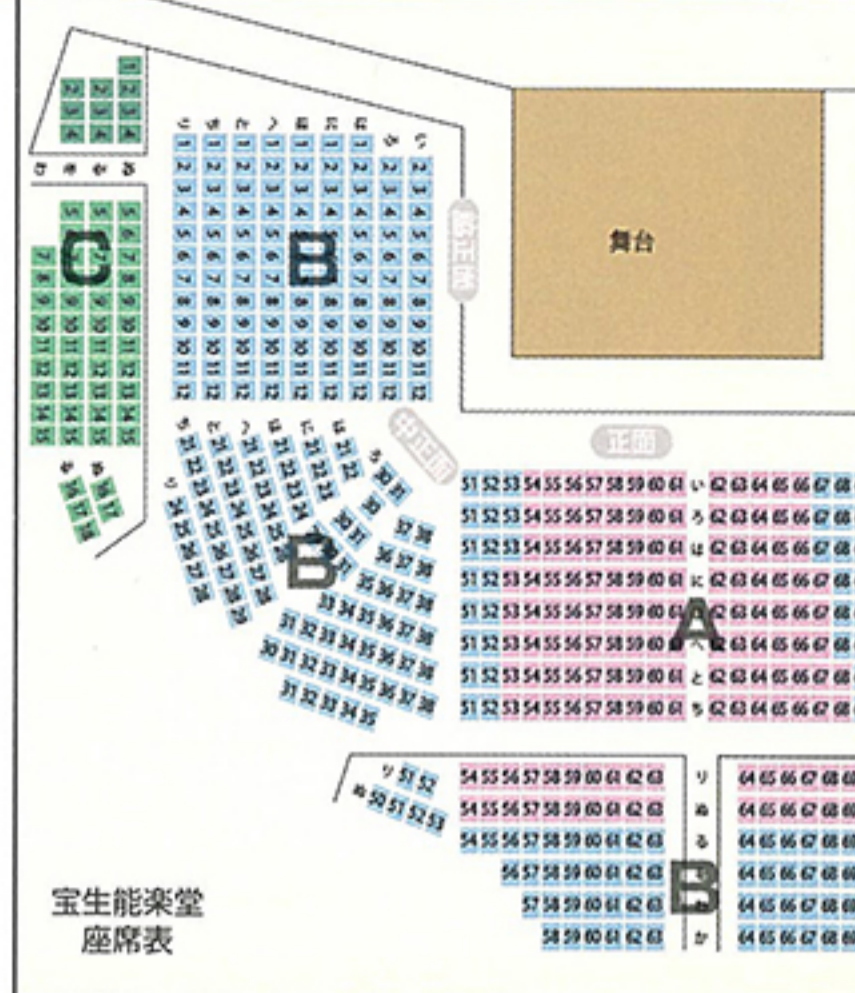
令和6年4月6日(土) 午後1時始 (開場12時)
於 宝生能楽堂

Hosyo Noh Theater 1-5-9, Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo
Saturday 6 April 2024 Start 13:00 (door open 12:00)

宝生能楽堂

東京都文京区本郷1丁目5-9
☎03(3811)4843

●三田線水道橋(出口A1)徒歩1分



入場料 (全席指定)

指定席 A 7,000円
指定席 B 6,000円
指定席 C 4,000円

※学生割引(要学生証)
各席 3,000円引き

お問い合わせ・お申し込み

e+ (イープラス) <https://eplus.jp/ath/word/69495>



カンフェティ TEL0120(240)540 (平日10:00-18:00)
<http://www.confetti-web.com/umeken>



公益財団法人 梅若研能会

〒151-0066 渋谷区西原1-4-2 TEL 03(3466)3041

〈メールアドレス〉 staff@umewakakenohkai.com

〈ホームページ〉 <http://www.umewakakenohkai.com>



YouTube はじめました! チャンネル登録をお願いします!



Facebook はじめました! 公演情報更新中!



令和6年梅若研能会 今後の公演開催日のお知らせ

六月公演	6月9日(日)	観世能楽堂
橘香会	10月14日(月・祝)	国立能楽堂
十二月公演	12月19日(木)	観世能楽堂



【碓潜】三世 梅若万三郎 (前島写真店)

能「田村替装束」「碓潜」みどころ講座

3月16日(土) 11:00~12:15
於・梅若万三郎家能舞台(渋谷区西原1-4-2)

受講料 1,000円 (※研能会入場券購入者は無料)

講師 「田村替装束」梅若 泰志 (うめわか やすし)
「碓潜」梅若 志長 (うめわか ゆきな)

梅若研能会四月例会

令和六年四月六日(土)午後一時始(午後十二時開場)
於 宝生能楽堂

六 浦キリ

加藤 眞悟

仕舞 鼓之段

中村 裕

舍 利キリ

長谷川晴彦
青木 健一

地謡
梅若 紀佳
伊藤 嘉章
古室 知也

前シテ(童子) 梅若 泰志
後シテ(坂上田村麿)

能 田

村替装束

ワキ(旅) 僧 村瀬 提
ワキツレ(従) 僧 村瀬 慧

ア イ(清水寺門前ノ者) 野村眞之介

大鼓 大倉慶之助
小鼓 幸 信吾

笛 成田 寛人



梅若 泰志

後見 梅若 雅一
中村 裕

地謡

梅若千音世 遠田 修
萩原 郁也 伊藤 嘉章
中村 政裕 青木 一郎
青木 健一 長谷川晴彦

(二時三十五分頃)

狂言 成上り

シテ(太郎冠者) 野村 万蔵

アド(主人) 石井 康太
アド(すっぱ) 河野 佑紀

後見 野村万之丞

休憩二十分

(三時二十分頃)

能 碓 潜

後ツレ(大納言局) 梅若 紀佳
後ツレ(二位 尼) 梅若 紀長
前シテ(尉) 梅若 志長
後シテ(平知盛)

ワキ(旅) 僧 村瀬 慧
アイ(早鞆ノ浦人) 野村万之丞

大鼓 亀井 広忠 太鼓 大川 典良
小鼓 飯富 孔明 笛 栗林 祐輔



梅若 志長

後見 青木 健一
梅若 雅一

地謡

加野 鉄音 遠田 修
萩原 郁也 加藤 眞悟
中村 政裕 八田 達弥
古室 知也 長谷川晴彦

(終了予定 四時三十分頃)

能 田村替装束 (たむらかえししょうぞく)

清水寺の地主の桜も花盛り。桜の木の下を清める童子は清水寺の来歴を語り、名所を教えるうち、音羽山に月が輝き桜花に映る景色は「春宵一國、値千金、花に清香、月に陰」という詩の通り。童子は田村堂に消える。やがて坂上田村麻呂の霊が現れる。天皇の勅命を受けて清水寺に詣でてから伊勢国鈴鹿に住む鬼神を討伐に向かい、当初は苦戦したが千手観音の助けを借りて、鬼神を残らず打ち果たしたのだった。前場では豊かに舞う童子の姿は、ほのほのとした心地良さを、後場の軍語りは勇壮な合戦の有様を躍動的なリズムで展開する。

狂言 成上り (なりあがり)

太郎冠者は、清水(きよみず)に参籠する主人の太刀を預かって共をするが、不覚にも眠ってしまう。その隙に都のすっぱが、太刀を青竹とすり換えてしまう。翌朝目を覚ました冠者は驚きあわてるが、青竹を隠し持って帰る道中、主人に「嫁が姑、小犬が親犬、渋柿が熟柿、山芋がウナギになるのを世上で成り上がりという」と話し、主人の太刀もこのように青竹に成り上がりましたと示して叱られる。太郎冠者のとほけた話が聴きどころ。

能 碓潜 (いかりかづき)

旅の僧が長門国早鞆浦で渡し舟に乗り、船を操る老人に壇ノ浦の軍物語を所望すると、老人は能登守教経と奮戦と最後の有様を語って消える。僧が平家一門の跡を弔っていると、海中から大船が浮かび上がり二位尼、大納言局、平知盛の霊が現れる。二位尼は安徳天皇の入水の有様を語り、知盛は戦での勇姿を見せる(舞働)と碓を載いて海底に沈む。前場で教経の最後を、後場で幼い安徳天皇と二位尼の入水、そして知盛の最期と三つの主題を巧みに盛り込んだ構成となっている。